

於寶殿前吐出水氣、不經時刻、雨脚少降。○下略

〔百練抄高倉〕嘉應元年三月廿六日、近日清水寺瀧水枯失、去正月、自瀧上蛇百許出來、占求之處、山崩瀧渴歟云々、今亦如此、爲奇、

〔十訓抄十一〕伶人助元府役懈怠の事によりて、左近府の下倉に召籠らる、此下倉○古事談には、蛇蝸のすむなる物をと恐をなすところに、夜中ばかりに大蛇案の如く來れり、頭は祇園の獅子に似たり、眼はかなまりのごとくにて、三尺ばかりなる舌さし出て、大口をあきて、既にのまんとす、助元魂失ながら、わな、く、く、腰なる笛をぬき出、還城樂の破を吹、大蛇來りと、ままりて、頭を高くもたげて、まばらく笛を聞けしきにて、返り去にけり、

〔源平盛衰記十四〕小松大臣情事

小松○平盛大臣、中宮ノ御方へ被申ベキ事有テ被參タリケルガ、仁壽殿ニ候ハレテ、帥典侍殿ト申女房ト暫シ對面有ケルニ、良アリテ帥典侍殿ノ左ノ袴ノスッヨリ大ナル蛇ハイ出テ、重盛ノ右ノ膝ノ下へハイ入ケリ、大臣コレヲ見給、我サハヒデ立ナラバ、中宮モ御騒有ベキ、帥典侍殿モ驚給ベシ、此事旁惡カリナント推シヅメ給テ、左ノ手ニテ、蛇ノ頭ヲヲサへ、右ノ手ニテ、尾ヲ押ヘテ、六位參レト召ケレバ、伊豆守其時ハ、未藏人所ニ候ケルガ、指出タリケルニ、是ハ何ト被仰タレバ、見候トテ、ツトヨリ、布衣ノ袖ヲ打覆テ罷出テ、御倉町ノ前ニ出テ、人ヤ候、參レト呼ケレバ、小舍人參タリ、是賜テイヅクニモ捨ヨトテ、差出シタレバ、一目見テ、赤面シテ逃歸リス、郎等省ニ賜タレバ、不恐蛇ノ頭ヲ取テ、大路ニ出テ、打振テ捨タレバ、蛇即死ケリ、翌日ニ小松殿、自筆ニテ御文アリ、昨日ノ御振舞還城樂ト奉見候キ、雖異體候一匹一振令送進候トゾ有ケル、黒キ馬ノ七寸ニ餘テ、太逞シキニ、白覆輪ノ鞍置テ、厚房ノ鞞ヲ懸タリ、太刀ハ長覆輪也ケルヲ、錦ノ袋ニ入ラレタリ、優ニヤサシク見エケル、仲綱御返事ニハ、御劔御馬謹拜領、御芳志之至、殊畏入候、抑去夜誠還城樂ノ